

片上港から一トン余りの無蓋の官船で約一時間海上を走って収容所の海岸に着いた。

渡り板がかけられ、しわしわとしわる足許のあゆみ板を看護婦に手を引かれて、やっと砂浜に降り立った。十二月末の海は冷たく、しぶきを浴びて体は冷え切っていた。

休む間もなく坂道を上がり、医局に着いて白く濁った消毒風呂に入り、縞の着物に着替えさせられた。

目の前で所持品が調べられ、現金は「預かり」とされ、衣類は消毒場に回された。竹筒に入れて持って来た硬貨の竹筒が割られて散らばるのが目に焼きついた。

収容所は約一〇台のベッドがあり、はじめてのベッド経験は心許なさをよけいに大きくした。集団収容の時はベッドを仕舞ってゴザを敷いて寝ることだった。新患は一週間ここにおいて、病歴や余病の有無などを調べられる。

四人の白衣をつけた患者付添がいて新入りを慰めたり、園内を案内してくれる。同室者に浪花節を語る男がいた。五〇がらみで手足が悪くぞろりとした着流し姿が似合う男だった。米若の佐渡情話がおはこのようで、夕方から寝るまでの手持無沙汰の時間、低い声で唸っていた。療養所ははじめてでないらしく物馴れしたところがあって、みな顔色をみながら楽しそうに語るのである。この男がいつ、どのように死んだのか覚えがない。戦争末期のおびただしい死者の中にいたことは間違いないことのように思える。

一週間の間に年齢、症状に応じて下がる舎が決められる。その日がくると舎から一〇人位の者が迎えに来て、それぞれ荷物を持ち、長い列をつくって出てゆく。私は十五歳未満なので山二つ超えた少年舎からおとっちゃんが子供たちをひきつれて迎えに来た。

一週間の間はいろんな人がやってくる。県人会の会長というのが来て、あらまし出身地を聞いたりして入会をすすめる。作業場の主任は病気の程度、人柄、強健度を見定めてうちの作業場に来ないかと勧誘する。若い女が来たと聞くと独身の男たちが夕方来て硝子戸越しに品定めをする。女性の発病率は低く、男女比三対一といわれていた時代で男女間のトラブル、争奪ははげしいものがあつた。他の療養所ではその争いをさけるため、ボスが順番を決めて今度来た女は誰にと割り当てているところもあつたということである。

帰省から帰園するところに三日間留めおかれ、検査を受けた。収容所は外部との病菌遮断の検疫所であり、多くの者にとって出口のない入口でもあつた。

アメリカ、カービル療養所の入口には、

“この門より入る者、すべての望みを捨てよ”

と書いてあるらしいが、この建物の入口に掲げている「収容所」の筆太の字はこの施設の有様を端的に示しているともいえた。